
MOON-4 夜叉 4 < 2 9 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 < 29 >

【Nコード】

N3313N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

記憶を取り戻した秀は榊から桜の正体を明かされる。また裕希も夜叉から九桜と和人との『繋がり』を知らされる・・・

夜叉 4 第1章完結と第2章のスタートです。

1・月夜（がつや） - 4 2・月夜（がつや） - 1（前書き）

同時公開です。お気軽にどうぞ。

1・月夜（がつや） - 4 2・月夜（がつや） - 1

1・月夜 がつや - 4

深夜。満月間近の夜。

桜はあれから眠ったままだった。

2階のバルコニーに彼らの姿があった。

「昼間のは本当に『桜』なのか？」

秀は傍らに立つ榊に言った。榊はややあつて、

「桜はあの夜、お前を待っていたんだ。」

「あの夜？」

「お前が帝王と出会った夜。」

「え……」

秀は目を細めた。「どう言う事。俺と人と桜とどういう関係があるんだ。」

「『記憶』を取り戻した様だな、秀。」

榊は視線を月から秀へと移した。「お嬢がかけた術をお嬢の中の『誰か』が解こう

としたんだ。それで、二つの意識が混乱してお嬢は血が切れたんだ。」

「……」

「お嬢は桜の精さ。厳密に言えば、何者かによつてあの桜の樹木に封印された『闇』の者。そしてその『封印』を解いてくれる強い血を持った者を待っていたんだ、ずっと。」

「それが……俺って事？」

自分を指差す秀。「俺は単なる狼男だぜ、お前と同じ。永久の強い血は持っていない。」

「それでも」

榊は呟く様に言った。「お嬢が選んだんだ、お前を。だけど、お

前は気付かず、帝王を選んだ。」

「偶然だつてば。んな事俺知らないし。」

秀の困惑の表情に、柁は笑みを浮かべた。

「そんなお前だから、お嬢は『永久』^{とこしえ}の相手にお前を選んだんだ。」

「・・・・・・・・」

秀は柁の瞳をじっと見つめていた。

ややあつて、

「お前は？」

「俺もお前と同じ位の血^{エナジー}を持っている。だから、桜を一時的に開放する事が出来た。だけど」

そこで、彼は一呼吸置き、「お前も判っている通り、お嬢の中にはもう一人『誰か』がいる。それが衝突した時、桜はとてつもない血^{エナジー}を放つ。昼間、お前を殺そうとした時のように。」

「・・・・・・・・そういう事。」

「深い事情までは判らない。俺は狼男^{ウルフ・ガイ}の末裔だが、桜から吸血鬼^{ヴァンパイア}に匹敵する『血』^{エナジー}をもらった。だから・・・・『ただ者』じゃないのさ。」

「柁。」

秀は言った。「俺は昼間、桜の中に九桜を見た・・・・・・・・あの闇色の瞳は確かに九桜だ。」

「・・・・・・・・」

柁は何も言わなかった。

秀は天空を見上げた。

「だけど」

秀はぼつり、と言った。「和人は・・・・・・・・もういない。」

あの紅の満月の夜・・・薄れる意識の中で、香木を胸に刺され倒れていく和人の姿だけが、脳裏に焼き付いている。

（守れなかった・・・）

下唇を噛み締める秀。

夜風は、そんな2人を優しく包みこんでいた。

2・月夜^{げつや} - 1

その夜、朝子の家で。

裕希はなかなか寝付けない。

（あの九桜って人を和人は倒せなかった。）

寝返りを打つ。窓からは満月間近の月光が差し込んでくる。

（どうしてだろう。あの時の和人の気持ち・・・俺が和人や秀さん、朝子さんを失った時と同じ気持ちだった。）

自分の中の和人の『記憶』を思い起こす。

タイセツナヒト

（和人にとって九桜が？）

裕希はベッドの上で身を起こし、

（だったら何故、和人は九桜と闘ったんだろう・・・いや、闘わなければいけなかったんだろう。）

右手の親指をきつく噛み、

（『帝王』って本当は何だろう。唯一無二の存在で闇を統べるって和人は言ってたけど、それが『真実』なのかな。）

ふいに、裕希は思い立ったようにベッドから飛び降りた。

「夜叉に聞いてみよう！」

小声でそう言うパジャマのまま深夜の寝室を後にした。

夜叉は夜の芝生の上に一人立ち、空を見上げていた。

その長い黒髪が風に大きく揺れる。

彼女の姿を見つけ、

「夜叉！」

裕希は小走りに彼女に近づいた。

「裕希。」

振り返る夜叉。「どうしたのじゃ？もう寝たのではなかったのかえ？」

「違うんだ。」

裕希は夜叉を見上げた。「和人にとって九桜は大切な人だったんでしょ、本当は。」

「裕希……」

「ねえ、教えてよ。どうしたら和人と九桜の関係が元に戻る？」

裕希の台詞に夜叉は少し沈黙した。それを見て、少年は、

「何か知ってるんでしょ、夜叉。」

月が……雲に隠れる。

「裕希」

夜叉は重い口を開いた。「若と九桜とは血が繋がっているのだよ。」

「え……」

「若の父上と九桜の父上とは兄弟なんじゃ。」

今度は裕希が沈黙する番だった。

喉の奥から引きつり出す様な声で、

「……どうして……従兄？」

「そう。」

夜叉は頷いた。「若の父上は帝王で、それに従うべきは九桜の父上……つまり弟なのだよ。しかし、若の父上は人間の女性を愛し、九桜の父上は生粋の『闇』の者を妻とした。」

「……」

「若の母上はその『闇の血』の『重さ』に耐えきれず若を生むとすぐに他界された。一方、九桜の方は生粋の『闇』の血を受け継い

で『帝王』としての権利保持者となつたのじゃ。」

「それで」

裕希は夜叉の顔を覗き込み、「2人の帝王が存在してしまったの。唯一無二の座の。」

「そうじゃ。」

「そんなの」

裕希は言葉に詰まった。「ひどすぎるよ。それでも闘わなければならぬなんて。」

「『運命』^{さだめ}だよ、裕希。」

月から雲が去っていき、夜叉の姿を明るく照らした。「やがて、九桜が復活すればまた新たな闘いが起こる。」

「俺、どうしたらいい？」

裕希は夜叉の袂を強く掴んだ。「どうしたら和人と九桜を闘わな
いですむことができる？九桜の『復活』を止める事ができる？」

「それは」

夜叉は溜息をついた。「それが判れば、若も苦しみはしないであ
ろう。」

「和人が・・・・・・」

裕希は俯いた。それから、勢い良く顔を上げ、「俺、和人に聞い
てみる！どうしたら闘わないで済むか。そして、例え九桜が眠つて
いても新宿で九桜の側を『狩らないで』済むか！」

「裕希。」

夜叉は目を見開いた。「そのようなこと、出来る訳ないではない
か。」

「できるよ、きっといい方法があるはずだ。」

そう言い残すと裕希は家に向かって走って行った。

（そう。『運命』は変えられるはず・・・それが、例え闇でも。）

1 月夜（がつや） - 4 2 月夜（がつや） - 1（後書き）

感想をお待ちします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3313n/>

MOON-4 夜叉 4 < 2 9 >

2010年10月11日04時00分発行